〈訳注〉

ザイン・アッディーン・マァバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（８）

谷　口　淳　一

第４章　フランクのマラバルへの到来と彼らの醜悪な行為の一部（承前）

［74（134）］

第13節　チャリヤム城をめぐる戦いとその征服

フランクによる敵対行為が何度か発生し、ムスリムたちはザモリン（al-Sāmrī）に対して、チャリヤム[1]城に対する戦いを強く促した。特にゴアをめぐる戦争[2]が行われていた日々には、その機会に乗じることを強く勧めた。というのも、その時には、フランクはマルカブ船[3]とグラーブ船[4]を支援のために派遣することができなかったからである。そこで、ザモリンはチャリヤム城に戦いを仕掛ける決意を固め、何人かの大臣たちをポンナニ[5]の民、チャリヤムの民の一団とともにそこへ向けて派遣

＊本稿は『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』第４章第13節～第14節（テキスト末尾）［*Tuḥfa/L*: 74－83］の日本語訳注である。原典と著者、訳注作成の方針などについては、「ジハード戦士の贈り物（１）」および「谷口2012」を参照されたい。本稿が扱う時期のマラバルおよびその周辺の諸事件については、Logan 1887［v. 1: 334－336］に概要が記されている。

１）Šāliyāt（Chaliyam）．カリカットの南10kmに位置するチャリヤム川河口の港市［Nainar 1942: 73; 大旅行記：６巻193頁注216］。

２）この戦争については「ジハード戦士の贈り物（７）」［*50－52*頁］に記述がある。

３）マルカブ船（marākib）：markab（pl. marākib）は船舶一般を意味する語であり、本訳では原則として「船」と訳している。ただし、特定の種類の船を示す語と併記されている場合は、区別するために「マルカブ船」と訳している。

４）グラーブ船（aġriba）：ġurāb（pl. aġriba）は軍用船の一種。櫂と帆の両方を用いる［Agius 2008: 348－351］。

５）Fannān（Ponnani）．カリカットの東南60kmに位置する港市。

した。途中でパラバンナ[6]、タヌル[7]、パラパナンガディ[8]の民が合流した。

〔9〕79年2月25日[9]水曜の夜、これらのムスリムたちはチャリヤムに入った。翌朝、彼らとフランクとの間で戦いが勃発した。ムスリムたちは城塞の外にある家屋を焼き払い、［75（133）］教会を焼き、外の城塞[10]を破壊した。ムスリムの3名が殉教し、フランクの一団が殺害された。フランクたちは石造りの堅牢な城塞に逃げ込んで籠城した。そこで、ムスリムたちとザモリンのナーヤル[11]は彼らを包囲した。他の地方からもムスリムたちがジハードのために到来した。彼らは城塞の周りに塹壕を掘り、注意深く包囲したので、食糧[12]は稀に密かにフランクの許へ届くだけとなった。ザモリンはこのことに多くの財貨を費やした。

戦いの開始から約2ヶ月の後、ザモリン自身がポンナニからチャリヤムへ到来した。完全な包囲が続き、ついにフランクの食糧が尽きて、彼らは犬など不浄とされるものを口にした。また、彼らの許にいる奴隷やキリスト教に改宗した男女が、食糧の少なさゆえに、許可を得て毎日のように城塞から出て行った。フランクはコーチン[13]とカナノール[14]からチャリヤムへ食糧を送り、そのために努力し戦闘にも及んだが、チャリヤムのフランクには少ししか届かず、不足分を補うことにはならなかった。

包囲の期間中、フランクはザモリンに使節を送って、城塞内にある巨大な大砲の一部と戦いに費やされた額に上乗せして財貨を差し出すとい

6）Parwanūr（Paravanna）．タヌルの南8kmに位置する港市。

7）Tānūr（Tanur）．カリカットの南40kmに位置する港市。

8）Parpūrānkāđ（Parappanangadi）．タヌルの北5kmに位置する港市。語末のđは、アラビア文字dālの下に∵が付されたもの。

9）ユリウス暦1571年7月18日。

10）外の城塞（al-qalʿa al-barrānīya）：「市街の外にある城塞」という意味か。Lopesはa parte exterior da fortaleza（城塞の外側）と訳している［*Tuḥfa_trans/L*: 80］。また、Nainarはthe fortifications built of mud（泥で建てられた防御施設）と訳している［*Tuḥfa_trans/N 1*: 87］。すぐ後に言及される「石造りの堅牢な城塞」との対比を意識して、形容詞barrānī（外の）を「土器」を意味するbarānīと解したのかもしれない。しかし、これは名詞barnīyaの複数形であり、テキストの当該箇所では文法的に適合しない。

11）ナーヤル（nayyār）：インド南部ケーララの有力カースト。戦士層を構成した。

12）食料（al-qūt）：*Tuḥfa/L*ではal-quwwa（力）と読めるが、A写本［f. 32b］およびB写本［f. 147b］に従って読む。

13）Kašī（Cochin）．マラバル海岸南部の港市。コッチ、コーチ。

14）Kannanūr（Cannanore）．カリカットの北西80kmに位置する港市。

う条件で和平を求めた。大臣たちはこの条件に同意していたが、ザモリンは同意しなかった。食糧の欠乏によって追い詰められ、和平の道が見出せなくなると、彼らはザモリンに使節を送り、［76（132）］ザモリンが城塞とその中にあるものと大砲を接収し、フランクを殺害しないで退去させ、彼らの持ち物には手出しせず、彼らを安全な場所へ送り届けることを〔提案した〕。ザモリンはそれを受け入れ、〔979年〕6月16日[15]月曜、彼らを城塞から退去させたのである。

彼は彼らに対して以上のことを履行し、屈服した彼らを送り出した。彼らにはタヌルの支配者が同行した。彼は、フランクたちを迎え入れて支援した人物で、表向きはザモリン側についていたが、内心ではフランク側についていた。彼は、彼らが必要とするものの費用を支出し、彼らをタヌルの町へ連れて行った。その後、フランクのグラーブ船がコーチンからそこへ到来した。そこで、タヌルの支配者は、彼らをその船に乗せ[16]、親切に扱った。以上のことゆえ、フランクたちは彼に感謝した[17]。そして彼らは、打ち負かされ恥じ入りながらコーチンに到着したのである。

そして、ザモリンは城塞内の大砲などを接収し、城塞は破壊して石塊とし、その場所を荒野のようにしてしまった。ほとんどの石と木材はカリカットへ運ばれたが、一部は城塞建設の際にフランクが破壊した古いジャーミィの〔再〕建のために確保された[18]。また、城塞が建てられていた土地とその周辺は、戦いの開始時に結ばれた取り決めに従って、チャリヤムの支配者に引き渡された。

城塞とその中にあるものがザモリンの得るところとなった後で、ゴアからグラーブ船とマルカブ船でフランクの援軍が到来した。至高なる神の許しと成就の素晴らしさによって、彼らは、落胆し恥じ入りながら、引き返していった。以上のことは、我々および全ムスリムに対する神の

15）ユリウス暦1571年11月5日。

16）彼らをその船に乗せ（ṭalla‘a-hum fī-hā）：「その船に」に相当する下線部は*Tuḥfa/L*ではfi-hiとなっており、船は男性単数代名詞で示されている。しかし、タヌルへ送られたグラーブ船は複数形で記されており、このままでは文脈に合わない。したがって、グラーブ船が女性単数代名詞（複数に相当）で示されている写本A［f. 133b］・B［f. 147a］・C［p. 76］に従って読んだ。

17）以上のことゆえ、フランクたちは彼に感謝した：ǧa‘ala ḏālika yad^{an} la-hu ‘inda-hum.

18）この城塞の建設とジャーミィの破壊については、「ジハード戦士の贈り物（6）」［*28*頁］に記述がある。

恩恵であり、慈悲である。［77（131）］

第14節　チャリヤム征服後におけるフランクの状況

以下のことを知れ。呪われしフランクは、チャリヤム城を征服されたがゆえに、ザモリンとムスリムに対して憤りと敵意をますます募らせ、ザモリンの領国を荒廃させることとポンナニかチャリヤムに城塞を築く機会を窺っていた。つまり、チャリヤム城を奪われた仕返しとして、ザモリンとムスリムに損害を与えようというのである。〔9〕87年[19]の終わりまで、神はフランクにそのようなことをたやすくさせることはなかった。ただし、〔9〕80年10月22日[20]、彼らはチャリヤムに上陸し、家屋と商業施設の一部を焼き払った。また、その後の年に、彼らはパラパナンガディに上陸した。4人のムスリムが殉教し、それ以上のフランクが死亡した。チャリヤムの城郭を奪われて以後、フランクたちはザモリンと和平を結ぶ気はなく[21]、彼〔の攻撃〕に耐え、ムスリムに対して復讐することを求めていたのである。

〔9〕85年[22]の航海期、フランクは、トゥルナドゥ[23]から米を運ぶために航海してきたムスリムの大小のグラーブ船50隻以上を拿捕した。殉教する者が出た。また、ムスリムとハリースの主たち[24]［78（130）］約3000人がフランクに捕らえられた。その結果、彼らが商売などのために出航することはほぼ途絶えてしまったのである。〔以上のことは、〕比類なき強者にして叡智者たる神の定めによるもので、それは神だけが知っている叡智と公益のゆえなのである。その最大のものは、ジハードと殉教、災難、忍耐ゆえに与えられる報酬である。誉れ高き神が彼らに安堵

19）ユリウス暦1579年または1580年。

20）ユリウス暦1573年2月25日。

21）フランクたちはザモリンと和平を結ぶ気はなく（laysa li-l-ifranǧ$^{-i}$ mayl^{-un} ilā ṣulḥ$^{-i}$ al-sāmirī）：*Tuḥfa/L*では下線部がal-ifranǧとなっており、前置詞li-を欠いているが、4写本［A: f. 34a; B: f. 148b; C: p. 78; D: f. 26b］に従って読んだ。

22）ユリウス暦1577年または1578年。

23）Tulnād（Tulu Nadu）．マラバル海岸のケーララ州北部Kasaragodからカルナータカ州Udupiにかけて広がる地域。

24）ハリースの主たち（aṣḥāb al-halīs）：halīsの意味は不詳。Nainarは人名と解しているようだが［*Tuḥfa_trans/N 1*: 89］、Steingasssのペルシア語辞典［*Steingass/P*］では、halīsaという語にan oarという訳がつけられている。ここから類推して、「櫂の主たち」すなわち「漕ぎ手たち」「船乗りたち」と解釈できるかもしれない。

を早く与えることと彼らに素晴らしい忍耐[25]を与えることを我々は期待する。至高なる神は次のように言った。

神は、苦難の後には安楽を授けるであろう［クルアーン：65章７節］。まこと、安楽は苦難とともにあり。まこと、安楽は苦難とともにあり［クルアーン：94章５－６節］。

さらに、前述の年[26]の航海期初頭、フランク――神が彼らを呪わんことを――は、スーラト[27]港から保護されしジッダ港へ航行し帰還してきたグジャラートの船の一群を拿捕した。その中には、最も栄光に満ちたスルターンであるスルターン・ジャラール・アッディーン・アクバル・パードシャー[28]――神が彼の支援者たちを強めんことを――の船もあり、そこには大量の財貨が積まれていた。このことによって両者の間に反目が生じた。その財貨の多さゆえ、和平のためにそれをスルターンに引き渡すことは、フランク――神が彼らを見捨てんことを――にとってたやすいことではなかった。誉れ高き神が、スルターン・ジャラール・アッディーン・アクバル――神が彼を力強く支援せんことを――を導き、彼がこの件を理由にフランクと戦い、彼の港市であるグジャラートのディウ[29]、ダマン[30]、バサイ[31]などから彼らを追放し、［79（129）］さらに、彼らが支配したその他すべての港市から追放することを、至高なる神の許しと成就の素晴らしさによって成就させるよう、我々は期待する。神は、以上のことを実現する力をもち、応えるにふさわしい方である。

あるグラーブ船の主たちがアーディラーバード港[32]の川に入ったところ、フランクが彼らを捕らえようとして追跡し、彼らを追って入っていった。しかし、彼らを捕らえることができなかったので[33]、フランクはその港全体とグラーブ船およびマルカブ船を焼き払った。それらの船舶は、

25）素晴らしい忍耐（ṣabr ǧamīl）：神から大きな報いが得られる忍耐という意味か。

26）985［1577/78］年。

27）Sūrat. インド西部グジャラート南部のカンバト（キャンベイ）湾に面した港市。

28）Ǧalāl al-Dīn Akbar Bādšāh（Pādšāh）．ムガル朝君主。在位963－1014［1556－1605］年。

29）Dīw（Diu）．カチャワール半島南端に位置する島。

30）Damūn（Damān, Daman）．スーラトの約100km南に位置する港市。

31）Wasay（Vasai）．ムンバイの約40km北に位置するバサイ川北岸の港市。

32）Bandar ʻĀdilābād. Nainarは、Dabholの近くにあった港と推測している［*Tuḥfa_trans/N 1*：95］。Dabholについては、本稿注36参照。

フランクの同意（qawl-hum）を得て許可証を所持していたダルマファッタン[34]とカナノールおよびその他の民のものであったのだが。

また、フランクはカラーファタン港市[35]を焼き払った。そこで、ダボール港市[36]――神がその街を保護せんことを――の総督（nā'ib）は、フランクの有力者や勇者（つわもの）150名を策略を用いて捕らえ、その大半を殺害し、一部をアーディル・シャー[37]の許へと送った。そこで、アーディル・シャー――神が彼を支援せんことを――は何人かの大臣と軍団をゴアに対する〔包囲のための〕布陣（murābaṭa）に割り当て、自国とその他の民に対して、食糧をフランクにもたらすことを禁じた。そして、使者（qāṣid）に書状[38]と贈り物をもたせて、アーズィラージャー[39]、ザモリン、コーラッティリ[40]の許へ派遣し、ゴアとの戦争とフランクに対する食糧禁輸について協力を求めた。

ところが、使者とその随員がクートゥークッラム[41]に到着すると、そこの支配者が彼と随員を投獄してしまった。その支配者とは、コーラッティリの〔継承順位〕第3位で、現在のコーラッティリが没し、その後にもう一人が没した後にその王国を支配することになる人物であった。

33）lammā lam yatamakkanū min aḫd^{i}-him. *Tuḥfa/L* では下線部が tamakkanū（彼らは…できた）とあるが、B［f. 149b］とC［p. 79］の2写本に従い、否定形（彼らは…できなかった）に改めて読んだ。

34）Darmafattan. マラバル海岸北部、カナノールの約20km南に位置する河口の島にあった港市。現在のDharmadamに比定される。Dharmapatam、Dah Fattanとも呼ばれた［Nainar 1942: 32; 大旅行記：6巻174頁注127］。

35）Bandar Qarāfatan. 不詳。Nainarは、ゴアの約80km南に位置するKarwar（Kārwār）に同定している［*Tuḥfa_trans/N 1*: 97］。しかしKarwarはダボールから350kmも離れているので、この文脈では不自然に思われる。

36）Bandar Dābūl（Dabhol）. ムンバイの約150km南に位置する港市。

37）['Alī] 'Ādil Šāh（1世）. ビジャープル王国（アーディル・シャーヒー朝）君主。在位965－987［1558－1579］年。

38）書状（marāsīm）：marsūmの複数形。*Tuḥfa/L* ではmarāsim（儀礼）となっているが、B［f. 149b］・C［p. 80］2写本に従って読んだ。

39）Āḏirāǧā. この人物は、カナノールを拠点としていた有力ムスリム 'Alī Āḏirāǧā［ジハード戦士の贈り物（7）：*44*頁注4］であろう。

40）Kūlattirī（Kōlattiri）. カナノール周辺を領有していた支配者の称号。

41）Kūtūkullam. 不詳。Nainarは、この地名をコーチンの南南西約50kmに位置するKottayamに比定している［*Tuḥfa_trans/N 1*: 97］。しかし、この比定に従うと、北方のビジャープル王国から送られたアーディル・シャーの使者がコーラッティリ領のはるか南方で捕らえられたことになってしまい、不自然である。

以上のことは、フランクの指示によるものであった。

しかし、使者はひとりで密かに無事逃げ出した。クートゥークッラムの支配者は、使者が携えていた財貨と［80（128）］贈り物をすべて接収した。アーズィラージャーとコーラッティリがその財貨と贈り物の返還について彼に手紙を送ったが、無駄であった。もしも使者が逃げ出せなかったとしたら、彼は使者と随員をフランクに引き渡していたであろう。以上は、〔9〕86年[42]のことであった。

その年、あるフランクの有力者がザモリンの許へやって来て、和平の件について彼と話し合った。そのときザモリンは、クランガノール[43]の近くにあって全マラバルの不信仰者たちの間で崇敬されている偶像の館にいたのである。ザモリンは、フランクたちがカリカットに城塞を築くという条件で和平に同意するとした。しかし、彼らはポンナニに築くことを要求したので、ザモリンは同意しなかった。しかる後、ザモリンは和平について話し合っていた件のフランクに同行させて、臣民のなかから3名の経験豊富な者を和平〔交渉〕のためにゴアへ派遣した。彼らはそのフランクとともにゴアへ入った。副王[44]と呼ばれるゴアの長（kabīr）は、彼を迎えて最大限の称讃と栄誉を与え、ザモリンの使節たちを手厚くもてなした。そして、使節たちはザモリンの許へ帰還したが、フランクがポンナニにおける築城を求めたために、和平の件は頓挫してしまったのである。この和平の件が頓挫したのは、〔9〕87年[45]のことであった。

その年、アーディル・シャーとフランクの間で、後者が財貨を供与するという条件で和平が成立した。また、コーチンの支配者は、ザモリンを前述の偶像の館から追い出すために戦う準備をし、多数の兵員を集めた。そして、ザモリンとの戦争で自分を支援するために到来することについて、フランクの長である副王に使節を送った。そこで、副王はグラーブ船を派遣した。これらの者たち全員が集結し、［81（127）］ザモリンと戦った。後者の軍勢（ǧamāʿa）は少数であった。しかし、神はその

42）ユリウス暦1578年または1579年。

43）Kudungallūr（Cranganur）．マラバル海岸中部、コーチンの約40km北に位置する港市。

44）副王（Bīzraw）：写本によって綴りが多少異なるが、ポルトガル語viso-reiのアラビア文字転写であろう。当時の副王（総督）は、Luís de Ataíde（在任1578－1581年）［Pearson 1987: xiii］。

45）ユリウス暦1579年または1580年。

恩恵によってフランクとコーチンの支配者を見捨て[46]、彼らの軍勢の多くが殺害され、彼らは敗走した。ザモリンとその仲間たちは、少数であったにもかかわらず、損害を被らなかった。

その後、ムスリムの航海を妨害し彼らのグラーブ船やマルカブ船を拿捕するために、フランクのグラーブ船がコーチンから出航していった。神が彼らを見捨て、比類なき強者と権能者の一掴みで彼らを掴まんことを[47]。

そして、〔9〕90または〔9〕91年[48]の航海期には、ザモリン側についているカリカット、バンダル・ジャディード[49]、カッパト[50]、ファンダライナ[51]、スィッコディ[52]、ポンナニの民に対し、フランクたちが布陣して厳しく〔封鎖〕し、彼らはその航海期の初頭から末までの間ずっとこれらの港市に対する〔封鎖を〕続けた。

それによって[53]、上記の民の航海は完全に途絶え、これらの地から近隣の地へ出て行くことも、トゥルナドゥから米が届くことも途絶えてしまった。そしてこの年、フランクが漏らすことも弛めることもなく上述の港市を〔封鎖し〕続けたために[54]、類例がまったく知られていないひどい飢饉が生じた。彼らはマルカブ船とグラーブ船を拿捕し、ついには、

46）本稿で参照したA写本の写真は、ここで終わっている［f. 36a］。

47）『クルアーン』54章42節にある「我らは比類なき強者と権能者の一掴みで彼らを掴んだ」という一節を踏まえた表現。「掴まん」と訳した箇所は、*Tuḥfa/L*ではāḫaḏa（懲らしめた）となっているが、B［f. 150b］・C［p. 82］・D［f. 28a］の３写本に従ってaḫaḏa（掴んだ）と読んだ。

48）ユリウス暦1582年、1583年または1584年。

49）al-Bandar al-Ǧadīd.「新しい港」という意味のアラビア語の名称から、比較的近い時代にザモリン領内に新設された港と推測されるが、その位置などは不明である。

50）Kāpkāt（Kappatt）. カリカットの10km余り北西に位置する港市。

51）Fandarayna/Fandarīna. マラバル海岸北部、カナノールとカリカットの間に存在した港市［Nainar 1942: 34－35; Tibbetts 1971: 457; 大旅行記：６巻176－177頁注138］。

52）Tirkūđ.（Trikkodi/Thikkodi）. カリカットの北西30kmに位置する港市。語末の文字は、アラビア文字dālの下に∵が付されたもの。

53）それによって（bi-ḏālika）：*Tuḥfa/L*ではbi-ḏikr-in（語りによって）となっているが、B［f. 150b］・C［p. 82］両写本に従って読んだ。

54）フランクが…続けたために（li-mulāzamat-i-him）：*Tuḥfa/L*ではal-mulāzamaと冠詞を付した綴りとなっているが、C写本［p. 82］および*Tuḥfa/Q*［p. 51（54）］に従い、前置詞と代名詞を伴う綴りに改めて読んだ。

上記の民が「我らが主よ、この不義なす民の町から我々を救い出し給え。我々に貴方の許から一人の保護者を立て給え。我々に貴方の許から一人の支援者を立て給え」［クルアーン：４章75節］と唱えてもおかしくない状況となったのである[55]。

しかし、翌年の航海期に［82（126）］フランクとザモリンの間で、フランクがポンナニに城塞を建設し、ムスリムが監禁している[56] フランクを彼らの長へ返し、フランクの許にいるザモリンの臣民を彼に返すという条件で、和平が合意された。そこで、ムスリムたちは彼らが監禁していたフランクを彼らの長の許へ返し、フランクは彼らの許で監禁されていた少数のムスリムをザモリンの許に返した。そして、その次の航海期にフランクの長がザモリンの許を訪れたときに、フランクとザモリンの間で城塞建設の約束が交わされた。

その次の航海期の初頭、ポルトガルから４隻のマルカブ船が到来し、そこには彼らのスルターンが任命した長が乗っていた。２隻はゴアに、２隻はクイロンの近くに到着した。そして、前任の長は離任した[57]。一方、ザモリンとフランクの〔新任の〕長との間で会合は行われなかった。というのも、この航海期に到着した長は、ザモリンに面会することなく、カリカットに立ち寄らずにゴアへと去った[58] からである。ザモリンは、会合の際に彼らの長に贈るために多くの品物を用意していたのだが、無駄になってしまった。

フランクの長がゴアに到着すると［83（125）］ザモリンはある重臣（ba‘ḍ kubarā’i-hi）を派遣した。そして、会合がおこなわれ和平が成立

55）〔彼らが〕…と唱えてもおかしくない状況となった（anšada lisān-u ḥāl-i-him）：*Tuḥfa/L*では下線部がištadda（激しくなった）となっているが、B［f. 151a］・C［p. 82］両写本に従って読んだ。

56）ムスリムが監禁している（fī isār-i al-muslimīn）：*Tuḥfa/L*では下線部がasārā（監禁された者たち）となっているが、D写本［f. 28b］に従って読んだ。

57）本書の記述によると、このインド総督交代は990または991（ユリウス暦1582－1584）年の航海期の後、３度目の航海期の初頭に行われたことになる［本稿：*8－9*頁］。航海期は１年間に１回めぐってくるので、この交代は、990または991年から２－３年後の992～994年、ユリウス暦では1584～1586年に行われたと推定できる。したがって、この記述は、1584年のFrancisco Mascarenhas（在任1581－1584年）からDuarte de Meneses（在任1584－1588年）への交代を示していると考えられる［Pearson 1987: xiv］。

58）ゴアへと去った（rāḥa ilā Kūwah）：*Tuḥfa/L*では「～へ」を意味する前置詞（下線部）が欠けているが、B［f. 151a］・C［p. 83］両写本に従い補って読んだ。

した。ザモリンの臣民たちは、以前のようにグジャラートやその他の港市へ航海が可能になり、また、航海期の末にカリカットからアラブの地へ2隻のマルカブ船による航海が可能となった。

神はムスリムの状況を正し、その損害を回復し、必要なものを与え給う。

アーメン　　アーメン

アーメン[59)]

59）*Tuḥfa/L*では、このように「アーメン」（āmīn）の語が三つならべられているが、4写本のうち同様に記されているのはD写本［f. 28b］のみである。A写本は末尾部分が確認できない［本稿：注46］。B写本には「アーメン」は一つだけ記され、その後に書写者による短い跋文がある［f. 151b］。C写本も「アーメン」は一つだけで、その後に1頁半に及ぶ書写者の跋文が記されている［pp. 84－85］。

文献および略称

『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』テキスト・翻訳

〈写本〉

Ms. 2799. British Library.（India Office旧蔵　Loth 1877: no. 714）［A（A写本）］

Ms. 2807. British Library.（India Office旧蔵　Loth 1877: no. 1044-V）［B（B写本）］

Ms. Arabic 28. Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland.（Morley 1854: no. IV）［C（C写本）］

Ms. Add. 22375. British Library（British Museum旧蔵　Cureton 1846-71: no. 945）［D（D写本）］

〈刊本〉

Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim. Ed. and trans. David Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898.［*Tuḥfa/L*］

Tuḥfat al-muǧāhidīn fī ba'ḍ aḫbār al-Purtukāliyyīn. Ed. al-Ḥakīm al-Sayyid Šams Allāh al-Qādirī. Ḥaydarābād: Maṭba' al-Tārīḫ, [1931].［*Tuḥfa/Q*］

Tuḥfat al-muǧāhidīn fī aḥwāl al-Burtuġāliyyīn. Ed. Muḥammad al-Sa'īd al-Ṭarīḥī. Bayrūt: Mu'assasat al-Wafā', 1985.［*Tuḥfa/Ṭ*］

〈翻訳〉

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マァバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（1）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』15号、2016年：*87-97*頁.［ジハード戦士の贈り物（1）］

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マァバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（2）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』16号、2017年：*33-54*頁.［ジハード戦士の贈り物（2）］

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マァバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（3）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』17号、2018年：*33-42*頁.［ジハード戦士の贈り物（3）］

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マァバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（4）」『京都女子大

学大学院文学研究科研究紀要史学編』18号、2019年：*27-46*頁.［ジハード戦士の贈り物（4）］

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マァバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（5）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』19号、2020年：*17-29*頁.［ジハード戦士の贈り物（5）］

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マァバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（6）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』20号、2021年：*27-40*頁.［ジハード戦士の贈り物（6）］

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マァバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』訳注（7）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』21号、2022年：*43-56*頁.［ジハード戦士の贈り物（7）］

Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim. Ed. and trans. David Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898.［*Tuḥfa_trans/L*］

Tuḥfat-al-mujāhidīn: an Historical Work in the Arabic Language. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar. Madras: University of Madras, 1942.［*Tuḥfa_trans/N 1*］

Tuḥfat al-mujāhidīn: a Historical Epic of the Sixteenth Century. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar.［Eds. P. K. Koya Kutty and A. I. Vilayathullah］Kuala Lumpur: Islamic Book Trust, 2006.［*Tuḥfa_trans/N 2*］

Tohfut-ul-Mujahideen: an Historical Work in the Arabic Language. Trans. M. J. Rowlandson. London: Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland, 1833.［*Tuḥfa_trans/R*］

辞典・目録類

Cureton, William, and Charles Rieu. *Catalogus codicum manuscriptorum orientalium qui in Museo Britannico asservantur*. Pars 2. Londini: Impensis Curatorum Musei Britannici, 1846-71. 3 vols in 1 vol. Hildesheim: Georg Olms, 1998.［Cureton 1846-71］

Loth, Otto. *A Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Library of the India*

Office. London, 1877. [Loth 1877]

Morley, William Hook. *A Descriptive Catalogue of the Historical Manuscripts in the Arabic and Persian Languages, Preserved in the Library of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. London, 1854. [Morley 1854]

Steingass, Francis. *A Comprehensive Persian-English Dictionary*. London, 1892. [*Steingass/P*]

史料・史料訳注

『コーラン』藤本勝次他訳．全 2 冊、中央公論新社〈中公クラシックス〉、2002年.

『日亜対訳・注解　聖クルアーン』[三田了一訳]、改訂版、日本ムスリム協会、1982年.

イブン・バットゥータ『大旅行記』イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳注、全 8 巻、平凡社〈東洋文庫〉、1996－2002年．[大旅行記]

研　究

谷口淳一「中世南インドのムスリム知識人――ザイン・アッディーン・マァバリー著『ポルトガル人の諸情報におけるジハード戦士の贈り物』に関する覚え書き――」森部豊・橋寺知子　編著『アジアにおける文化システムの展開と交流』関西大学出版部、2012年：231－243頁．[谷口2012]

Agius, Dionisius *A*. *Classic ships of Islam : from Mesopotamia to the Indian Ocean*. Leiden: Brill, 2008. [Agius 2008]

Logan, William. *Malabar Manual*. 2 vols. Madras: The Government Press, 1887. Rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1989. 5 th rpt, 2010. [Logan 1887]

Nainar, S. Muhammad Husayn. *Southern India as Known to Arab Geographers*. New Delhi: Cosmo, 2004. Rpt. of *Arab Geographers' Knowledge of Southern India*. 1942. [Nainar 1942]

Pearson, Michael Naylor. *The Portuguese in India*. Cambridge et al.: Cambridge University Press, 1987. Vol. 1.1 of *The New Cambridge History of India*. Gen. ed. Gordon Johnson. 24 vols to date. 1987- . [Pearson 1987]

Tibbetts, Gerald Randall. *Arab Navigation in the Indian Ocean before the Coming of the Portuguese: being a translation of Kitāb al-Fawāʾid fī uṣūl al-baḥr waʾl-qawāʾid of Aḥmad b. Mājid al-Najdī: together with an introduction on the history of Arab navigation, notes on the navigational techniques and on the topography of the Indian Ocean and a glossary of navigational terms*. 1971. Rpt. London: Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, 1981. ［Tibbetts 1971］